

CSR REPORT 2013

CHUETSU PULP & PAPER Co., Ltd.

Chuetsu Pulp & Paper stands on a global viewpoint, and tries hard on the basis of "environment-friendly corporate activity" aiming at global environmental protection and realization of the affluent society in which sustainable development is possible.

特集
「里山」は、企業も社会も強くする
—対談・藻谷浩介氏—

中越パルプ工業株式会社
社会環境報告書



写真：岩間 敏彦

中越パルプ工業株式会社

この冊子に使用している用紙の壳上の一頁は、
生物多様性を保全する活動に寄付されています。
また、この紙を使用することで用紙の
有効活用が推進されます。



この用紙は環境にやさしい
Non-VOC のハイグリッド
UVインクを使用しています。





私たちには、持続発展が可能な
豊かな社会の実現を目指します。

Special Contents ①

里山、竹、そしてビジネス P4-5

香坂玲／金沢大学大学院 准教授

Talking about SATOYAMA

【対談】「里山」は、企業も社会も強くする P6-11

漢谷浩介／株式会社日本総合研究所 調査部主席研究員

原田正文／中越パルプ工業株式会社 代表取締役社長

Special Contents ②

社員コラム・三つの里山巡り P12-15

The Japan Awards for Biodiversity 2013

第3回「生物多様性日本アワード」 P16

Action for Environment

環境への取り組み P17

The Utilization of Waste

廃棄物の有効利用 P18

Environmental Management System Reinforcement

環境管理体制の強化 P19

Climate Change Measures

気候変動対策 P20

Procurement of Raw Materials

原材料の調達 P21

Keeping Employee's Health and Safety
従業員の健康と安全 P22

Topics in 2013
2013 トピックス P23

Symbiosis with the Local Community
地域との共生 P24

Participation in Local Community Events
地域行事への参加 P25

Material Balance with the Production Activity
生産活動に伴うマテリアルバランス P26

Environmental Accounting
環境会計 P27

Main Environmental Data
主要な環境データ P28-29

Company Profile
会社概要 P30

Locations and Facilities
事業所一覧 P31

中越パルプ工業では「愛され信頼される企業に」「環境と社会に貢献する企業に」「向上心あふれる働き甲斐のある会社に」を経営理念の柱としており、地域社会との共存共栄を図り、環境に配慮した生産活動を通じて循環型社会の確立を目指しています。

そのなかでも当社独自の取り組みとして、日本の竹100%を原料とした「竹紙」や国産間伐材を最大限活用し、なおかつ用紙の売上の一部を里山に還元する「里山物語」など、紙の製造販売という本業を通じて、日本の森林や里山保全、生物多様性保全や地域経済活性化などの社会課題に取り組んでいます。

里山、竹、そしてビジネス

香坂 玲（金沢大学大学院 准教授）

Ryo Kohsaka

生物多様性・自然資本とビジネスを考えるときに、中越パルプ工業の竹紙と里山物語は、製紙業界の取り組みの中でもユニークだ。まず、竹紙は「害」を「益」に変える発想で、第8回「エコプロダクツ大賞」をはじめ、数多くの賞に選ばれてきた。今年は、そのなかに、イオン環境財團の第3回「生物多様性日本アワード」が加わった。

超大企業ではなくとも、確かな技術力でキラリと光る存在であったことが評価されたのだと思う。一般の方々にとっても、日本全土に広がりつつある竹を活用して紙やノートにしている取り組みは分かりやすく訴求力がある。

そもそも竹は日本の伝統工芸などに使われ、我々の生活の一部である。筍堀りなどを、家族や学校で楽しんだ方も多いことだろう。私の在籍している金沢大学でも、学生団体と生協が協力する形で、食堂で筍御飯が提供されている。そのポスターのキャッチフレーズは、「たけのこ堀りで里山保全」となっている。

なぜ、里山を保全するのかと、最近は、竹林による「害」の部分が注目され始めるからだ。その猛烈な繁殖力で、草地、森にどんどんと侵略して、もともとあった景観や生態系を変えてしまう。科学者のなかには、生物多様性や里山の荒廃の指標として使う専門家もいるほどだ。というのも、人が里山を維持で



きなくなった場所の目安として、竹林の面積というのはある程度正確な物差しとなるからだ。

竹林は民家の近くでも容赦なく忍び寄り、頭を悩ます自治体も多い。地域、企業のボランティアで、竹林を刈って抑え込もうとする活動は、木を開引く間伐や植林と並んで頻繁な活動になっている。ただ、「雨後の筍」という言葉があるように、切っても切っても生えてくる。そのおかげで毎年筍をいただけるのだが、森や家屋の管理者には悩ましい問題だ。

竹は根が水平方向に広がるので地中に柵を立てる、熱に弱いので伐採したものを集め熱するといった対策が実施してきた。このように、竹は古くから日本にある植物であると同時に、現在では、侵略的な種として、多くの地域、とくに里山の生態系に対する脅威となりつつある。



その害が目立ってきた竹について、おしゃれな紙にしてしまう、という同社の竹紙は発想の転換が光っている。ただ、木とは違って、竹は簡状で空気の比率が高く、かさばるので本来は紙生産には向かない。「空気を運ぶようなもの」だが、放置竹林を何とかしたいという思いを共有する方が運んでくれる。硬いのでチップにする際に機械の刃を痛めやすいといった技術的な難しさを克服して、日本の竹 100% でできた「竹紙」は 2009 年に誕生した。

普通の紙はどうしても高くなる竹紙。私の研究室では、2012 年には同社の社員を招いてゼミでも勉強会を開いたが、今後は製品としての出口が鍵で、高級感のあるノートや環境イベントでのチラシなどで活用の輪が少しずつ広げる摸索に期待をしたい。私の大学のコースのパンフレットも竹紙を使用させてもらっている。若い世代に入々の感度に訴える力に期待している。

一方の里山物語は、環境省の「森林認証材・間伐材に係るクレジット方式ガイドライン」を取り入れた。同社の集荷した証明書付間伐材が 100% 実配合されたと同じ効果を持つ、クレジット方式でのスキームを構築した紙となっている。「木を切るのは環境に悪い」という誤解はなかなか一般の方々の間からなくならないが、里山物語というソフトな語り口で、間伐の有用性を語ってくれている。

竹紙と里山物語の発想は、他の企業が学べる点も多い。まず、「環境貢献や生物多様性なんて大企業だけが取り組むもの」という抵抗に対して、中越パルプ工業は業界の最大手でなくとも、存在感を發揮している。

また、農林業やサービス業ではなく、製造業、それもコスト競争が非常に激しい製紙という業界においてこのような取り組みを実践している。「不利、無理」という発想を逆転させて、自分たちだからこそできること、無理に見えるからこそできることに各社が挑戦して、地域に根ざしたユニークな試みを、生物多様性や自然資本という枠組みは許容している。

気候変動が、CO₂削減、エネルギー使用の低減という非常に狄義な活動に落とし込まれているのに対して、生物多様性では、まだ独自で地域色の強い活動が可能であることを示しており、大いに参考となろう。



Profile

香坂 玲 Ryo Kohsaka

金沢大学大学院人間社会環境研究科 地域創造学專攻准教授

静岡県生まれ、東京大学農学部卒業。2005 年からカナダ・モントリオールの国連環境計画生物多様性委員会事務局での勤務を経て、2008 年 4 月から 2012 年 3 月まで名古屋市立大学大学院経済学専攻科の准教授。2012 年 4 月から現職。著に、「生物多様性と私たち COP10 から未来へ」(岩波ジニア新書)、地域再生、環境から生まれる新たな試み」(岩波ブックレット)。生物多様性の権威。



【対談】

「里山」は、 企業も社会も強くなる

原田 正文 中越パルプ工業株式会社
代表取締役社長

藻谷 浩介 株式会社日本総合研究所
調査部主席研究員

Talking about SATOYAMA

写真：川畠嘉文

『里山資本主義』(角川 one テーマ 21)という本が話題を集めている。その著者である藻谷浩介氏は「21世紀の資本主義のあるべき姿は里山にある」と説く。中越パルプ工業は4年前から、里山に資金を還元する「里山物語」という紙を販売する。ともに山口県出身で、「里山」というキーワードで結ばれた二人が、今後、企業として目指したい方向性を話し合った。

司会：森 樹（株式会社オルタナ 代表取締役社長 兼 オルタナ編集長）

▲ Talking about SATOYAMA | 対談 | 「里山」は、企業も社会も強くなる

原田：『里山資本主義』を本屋で最初に手に取った時、こういう本が出ていたのかと非常に興味を持って読ませて頂きました。私の実家が山口県で林業をやっていたこともあります、一番興味を引かれたのは、岡山県真庭市^(※1)に関する部分です。

東日本大震災の後、岩手県住田町という、非常に林業の盛んな所を訪れました。町長さんは、地域の杉を使って仮設住宅をあつという間に造られました。私たちは、当社の従業員からの義捐金を持っていて、寄付させて頂いた。

そこで町長と話をさせて頂いたのですが、いわく「もう日本では林業は成り立たない、だめだ」と仰ったことが印象的でした。それでも住田町というのは日本一の林業の町を目指そうと、色々なことをやっておられます。

森を持続的に発展させるためには、森林の資源がきちんと守られなければならない。そのためには土台となる林業が非常に大事です。真庭町は、そういう強い思いがあるからこそ、きちんと林業ができている。林業もそういう思いを持ってすれば、色々なアイデア、知恵も出てくるでしょう。日本はいま森林資源が増えていますから、将来的にもまだ夢はあるのかなと痛感させられました。

鹿児島や富山で里山を整備

森：一方で、企業は経営者として常に売上高や利益を高め、株主の期待に応えなければならない。『里山資本主義』では価値観の転換を提唱していましたが、その辺はどう思われますか。

原田：残念ながら製紙業は40年ほど前から「公害の元凶」のように言われ、未だにそういうイメージがあります。木材資源を大量に消費している側面もあります。

そこで、木材を大量に使う会社として、森林をきちんと守っていくことは大事だと強く思い、4年前に鹿児島や富山県の工場の近くで里山の整備事業を始めました。最初は従業員が中心になり、地域ボランティアの協力も得て、毎週1回、下草刈りや木を切ることから始めました。

あれから4年経ち、ずいぶんきれいになりました。去年の春からは森林学習なども始め、「中巴の森」として開放し、地域の人にも喜ばれています。今年（2013年）9月には、鹿児島県で森林ボランティアの活動舞台として当社の山を



藻谷 浩介 Kosuke Motani

株式会社日本総合研究所調査部主席研究員
株式会社日本政策投資銀行特任顧問

1964年、山口生まれ。著書『デフレの正体』(角川 one テーマ 21)は50万部のベストセラーなり。生産年齢人口という言葉を定義させ、社会に入口動態の影響を周知させた。2013年7月に出版された『里山資本主義』(同)もベストセラーとなり、大きな話題を巻きめた。

選んで頂き、約400人が集まって、整備して頂きました。

森：薩摩川内市の工場の近くですね。

原田：はい。本当に里山という感じで、すぐ下には民家もあります。富山でも先月19日に、地域の方をお呼びして、山の整備具合を見て頂きました。もちろん会社のイメージを変えていきたいという思いもありますが、5年前に経営理念を見直したことが背景にあります。

当社は、環境と社会に貢献する企業、地域社会から愛され、信頼される企業という大きな目標を立てました。地域の皆さんと関係を強化していくながら、ともに生きていく。その一環で、里山を整備すれば非常に良い空間になる。そんなモデルケースにできればと、始めたのです。

森：藻谷さん、「里山資本主義」の筆者として、今の原田さんのお話をどのように聞かれましたか。

藻谷：敬服するばかりです。

多くの人が昔から取り組んでいることを、今発見したかのように本に書くのは、原田社長のような先人の方々に対して恥ずかしいという思いがありました。逆にお褒めいただけ、ありがとうございました。

お金の循環で成り立つマネー資本主義が、社会のメインストリームであるとすれば、里山資本主義はサブストリーム。日本人は、バックアップを持たない一本足打法が好きですが、実際には多様性こそが保険となって、システムの安定を生むのです。

里山や離島の住人は今でも、お金も電気も使ひけれど、薪も焚くし烟も作っています。天災や景気変動に影響されにくい、安定度の高い営みです。そこに新技術や新たな絆を組み合わせれば、都会人も思わずうらやむ楽しい暮らし方ができる、それがこの本で今更ながらに紹介したかったことなのです。

ただ、この本に出てくるのは、個人や中小事業者の取り

岡山県真庭市^(※1)：2005年に周囲の9つの町村が合併して発足した市で、岡山県北中部に位置する。人口は5万人超でその面積の8割を山林が占める。同市にはバイオスマス発電「バイオスマス発電」があり、とともに木質バイオスマス発電など民間主導で始まった取り組みを支援している。全市で消費するエネルギーのうち、11%を木質エネルギーでまかなっている。



原田 正文
Masafumi Horada
中越パルプ工業株式会社
代表取締役社長

組みばかりです。厳しい国際競争を戦っておられる製紙業界の大企業が、里山に取り組んでおられると伺い、この本に欠けているところを見事に補っていただいた感じがしました。

しかも中越パルプ工業さんは、バイオマス発電^(※2)にも取り組み始めておられるそうですね。御社のような木材利用のプロがこれに取り組まることは、たいへん心強いことです。

森：バイオマス発電のごとをご存じだったのですね。

藻谷：日本の紙は、印刷用高級紙はもちろん新聞紙でも板紙でも、世界に卓越した品質を持っています。外国製の段ボールがいかにボロボロか、新聞紙がいかにヨレヨレか、海外に引越したことのある人はご存知でしょう。自動車でも家電でもなく紙こそ、日本が世界の真似できない技術を持つ分野なのです。

でも残念ながら内需がどんどん伸びていく状況はない。価格競争が進み、明らかに高品質のものを海外と同じ値段で売っている。これでは儲かりません。

そんな中で御社のように、まっとうに本業を遂行しつつ、さらにメセナ的な要素のある「里山保全」や、新たな発電事業にも取り組まれる企業がある。頭が下がります。そういう大企業が他の業界にも少しでも増えてくれれば、この本でも想定していない日本の希望になると思います。

バイオマス発電に進出へ

原田：当社の工場がある鹿児島県は森林の蓄積量がとても多いし、成長量も非常にあります。しかし日本では昭和40年代から製紙原料が足りなくなり、どんどん原料を輸入にシフトしてきました。当社では地域の取引先であり原料を提供してもらう素材生産業の方と、苦しいながらも協力しあい、何とか木材チップ工場もつぶさなくて、関係をずっと続けてきました。だからこそ、いま製紙原料として使う間伐材の量は、当社が圧倒的に多いのです。

その中で、再生可能エネルギーの固定価格買取制度(FIT)が2012年7月に始まりました。鹿児島県で木材の年間成長量は250万立方メートルほどですが、およそ4分の1しか活用されていません。こうした地域の優位性を活かし

鹿児島の未利用資源をもっと使おうということで、バイオマス発電を始めることにしました。

森：素晴らしいですね。

藻谷：実は私にとっては、鹿児島の製紙工場というのは盲点でした。先ほど「公害産業」と仰いましたが、地方の町では確かに、空気の臭いがパルプ工場が近くにあると分かる場合があります。ですが、御社の工場がある宮崎県高岡市や鹿児島県薩摩川内市に行った時に、そういう臭いを感じたことがない。ですからあそこに製紙業があるというのは、あまり自覚できていませんでした。

原田：どこの工場も臭いがないよう、最小限に抑えています。**藻谷：**そうですよね。やはり御社は非常に環境に気を遣ってらっしゃると思います。そしてこの話の背後には、他の日本の産業にも通じる問題があります。

ありがたいことに国内のユーザーは、品質の高い国産紙を求める傾向が高い。でも品質へのこだわりの薄い海外の市場では、日本の紙はコストの面で競争にならなりません。

ですが本米、世界の製紙会社が日本と同じ環境基準に従っていれば、そこまでコストに差が出るはずはありません。環境コストを払っていない海外企業と、高いコストを払っている日本企業が同じ土俵で価格競争をしているような状態なので、コストを払っている方が負けるのです。森林資源の問題もそうで、外国産材の方が安いという方は分かりますが、そればかり買っていては、再生産にお金をかけていない収奪型の林業に手を貸すことになりかねない。

そんな中で環境対策を万全にしつつ国産材の利用も進めておられるのは、素晴らしいとしかいいようがありません。

それから薩摩川内市には原発もありますね。でもこれは北部九州の大都市圏の需要のためのもので、鹿児島県だけなら自然エネルギー比率はぐっと高められます。福島も同じ構造ですが、地熱もありますし、木材資源の量も多い。そういう場所でバイオマス発電が始まると言うのは象徴的な話で、地元の方も歓迎しているのではないかでしょうか。

原田：そうですね。皆さんやはり前向きですね。行政の方にも支援を頂いています。

「志」の高い社員を育てる

森：コスト削減も大事なのですが、今後は市場を創造し、市場に価値を分かってもらい、買ってくれる人を増やすことが大事ですね。

藻谷：その通りです。まずは一企業の取り組みとして、「志」の高い顧客を発見し、小さいながらも市場として育てることでしょう。そうした積み上げの後に、日本社会全体の意識の底上げが実現していくかもしれません。

御社が「里山物語」でやられているのも、まさにそれですね。環境保全のために少し高くていいものを使おうという顧客を育てようするのですが、いつごろから始めたのですか。

原田：「里山物語」の販売は4年ほど前からですが、竹紙は15年ほど前から、鹿児島の川内工場で原料として竹を使い始めたことから始まります。この辺りは「たけのこ」の生産が非常に盛んな所で、良いたけのこを見るにはうまく間伐をしていかなければいけない。それで、伐った竹の処分に困った方がいました。

当初は月に200トンくらい買っていましたが、4年前から本格的な体制にしました。伐った竹を所定の長さに切り揃えて頂いて、軽トラに積んで、チップ工場まで持ってきてもらおう。持ってきてくれたら買い取りますという仕組みにしたのです。

竹は非常に堅いものですから、チッピングする機械の刃が早く傷んでしまう。その分少しコストが掛かるけど、その分は当社が必ず買い取りましょう。皆が少しずつ負担をする仕組みがうまくできたと思っています。今では、年間約2万トンの竹を原料として使っています。

藻谷：この「竹紙」^(※3)は、表面はすべすべなのに芯が強いですね。

原田：竹の繊維はちょうど針葉樹と広葉樹の真ん中くらいの性質です。これは竹100%の紙ですが、木材パルプに竹パルプを10%混ぜたものもあります。爆発的には売れないのですが、これから環境意識の高まりにつれて、そういう思いの方は必ず増えてくるでしょうから、長く続けることが一番ではないかと思います。先ほどお渡した名刺も、実は竹紙なのです。

藻谷：竹は全国で生え放題になっていて、皆さんが困っていますね。

原田：竹を大量に処分するのであれば、当社のように紙の原料にするのが一番良いです。

藻谷：岩手県大船渡市では、セメントの原料に震災がれきも使って



森 捷
Setsu Mori
株式会社オルタナ 代表取締役社長
兼オルタナ編集長

column vol.1

コラム



「里山物語」とは

「里山物語」は間伐材活用による森林保全、寄付金による新しい里山保全活動という2つの大きなコンセプトを持った印刷用紙です。

1. 日本の森を守る活動

国内森林面積の約4割を占める人工林は、人の手による管理が不可欠です。植林、間伐、主伐などの作業を繰り返すことにより、生物が豊かで、良質な木材を生む林になります。「森を守るために間伐材をたくさん使うことが大切」と考え、証明書付きの間伐材をクレジット方式で紙の原料として最大限活用しています。

2. 里山と生物多様性を守る活動

生物多様性の宝庫である里山を守るために、「里山物語」の代金の一部に寄付金を付加することで、里山を有効活用している団体の活動を支援する仕組みをつくりました。寄付金は協業する「特定非営利活動法人里山保全再生ネットワーク」が、経済価値を失いつつある里山に新たな価値を発掘したり、新たな用途で里山を活用する団体の活動持続性を高める目的で運用しています。

「里山物語」を採用したユーザーは、日本の森を守る活動及び里山と生物多様性を守る活動を支援したことになります。

里山保全再生ネットワーク

<http://satoyama-saisei.net/>

中越パルプ工業は、NPO法人里山保全再生ネットワークと協働しています

バイオマス発電^(※2)：未利用間伐材の利用促進を図るため、川内工場で木質バイオマス燃料を使用した発電事業に参入するため、木質バイオマス発電設備設置を進めている。2015年11月稼働予定。

「竹紙」^(※3)：鹿児島県の川内工場で1998年から未利用資源となっていた竹を製紙原料として有効活用する取り組みを開始。試行錯誤を重ねながら、現在年間2万トンを超える竹の集荷体制を構築する。2009年からは竹100%の竹紙の販売を開始。全国に広がる放逐竹林という社会的課題の解決には竹の大変調査が欠かせないが、紙の原料にするという本業に取り込んだ活動となっています。



います。セメントは、日本中の色々な燃えにくいものすべて燃やして再生利用できる、優れたリサイクル産業でもあります。バルブも同じように、本当に優れたリサイクル産業ですね。ですがセメントも製紙もエネルギーを多く使います。昨今の円安の下では、皆さん燃料費の高騰でさぞお困りでしょう。

原田：私たちも大変ですよ。

藻谷：そんな中、この竹紙についても、品質を重視して高く買ってくれるユーザーを育てなければなりませんね。ノートにされているだけはもったいない光沢があります。

森：大手製紙メーカーの中で竹紙を生産しているのは、御社だけですね。この辺りが企業のサブシステムとして良い例だと思います。

原田：いろいろな関係者の方々に協力して頂き、だれかにコスト負担を集中させることのないようなうまい仕組みを作り上げたということですね。

藻谷：そもそも多くの大手企業は、御社のような地域との協働に慣れていません。値下げ競争の中でその余裕がないのです。ですが皆が値下げの方向だけで競争し出すと、全社赤字の業界になっていくことになります。厳しい競争をしつつも地域と歩むゆとりも持つことが大事です。

原田：当社は色々な地域で事業をしてきました。その強み弱みを分析して、独自性のある事業活動をしていかなければなりません。

例えば川内工場は、東シナ海に面していて、東京に行くよりもむしろ中国大陸に行く方が近い。中国はバルブが不足気味なので、そこに売るとか。鹿児島は森林資源が多い、そして竹の放置林問題で困っています。これを逆手に商品開発する。バイオマス発電もそうです。

当社は、環境にも地域にも配慮していると、社会に思って頂けるような会社になりたい。そして、そんな会社だったら、どこかに推奨してやろうかという方が増え、だんだん火が付いていけば、最終的には会社の力につながっていくでしょう。

「紙のルイ・ヴィトン」を目指して

藻谷：本当にその通りですね。日本全体も同じです。価格競争だけなら、結局規制の緩い国が勝ちます。でも、規制の緩い国が勝つということは、地球が壊れていくということです。逆に日本のように規制がきつい中でやっている企業が、

世界で勝ち続けていけば、地球も助かる。

農林業でも、地力を損耗しない方法を守っている事業者が生き残っていないと、世界全体がおかしくなる。自由競争を絶対的に信奉する「新自由主義」に従えば、どっかでズルをして後後にツケを回した会社が勝者だというジャッジをしてしまいかねませんが、それは愚かなことです。

里山資本主義の中でも紹介している、中欧のオーストリアの林業は、規模の利益では北米や東南アジアなどに絶対勝てません。環境コストが高い上に、降水量や日照が少ない分、自然の再生産力も日本より低い。余り激しく切ったら禿げ山になってしまいかねない。彼らはそこを分かった上で、グローバルな競争の中で林業大国、木材資源輸出国になっている。

「21世紀はアジアの時代」という人がいますが、日本のみなぎり韓国、台湾、中国でも少子化が進行しており、むしろアジアの先行きは不透明です。他方で私は、「欧洲の復興」という密かな流れを感じています。第一次、第二次世界大戦、冷戦と20世紀を通じて恐かな内輪もめを重ね、米国や東アジアに後れを取ってきた欧洲が、内輪もめを卒業し、しかも質の高い供給による持続可能な成長、という点で再度リードを始めているように感じます。もちろん欧洲にも、アフリカなどの天然資源、人的資源を収奪して食いつなぐ企業がありますが、そうではなく欧洲内でサステナブルなやり方をする会社もあります。後者が意外に健闘していることが、競争力強化につながっているのではないかでしょうか。

もちろん日本にも、欧洲にもないような、志も品質も高い会社がたくさんあります。御社の竹紙は典型だと思いますが、こうした製品の質を評価できるようなマーケットを日本に作り、さらには中国あたりにも御社の商品を買入間を一部作り出していくことはなりません。竹紙の場合、紙系のクラフトを作る人やとか書道家など、その道のプロの需要に合っているかもしれませんね。

原田：書道する人は非常に評判がいいです。墨の乗りが良い。それから付き合ってある書家の先生で、墨とインキで書くんですけど、非常に竹の紙を気に入っているのです。

藻谷：中国の書道家にもきっと高く評価されると思います。品質がいいだけでなく、エコの産物であるわけですから、「紙のルイ・ヴィトン」のようなブランドで育てられると良いですね。
原田：竹紙は、当社の独自性の取り組みの一つとして、象徴的なものにしたいです。まだ厳しいですが、長いことやってければいつか芽を出します。そして、従業員の自信の一つになってほしいです。

藻谷：武士は食わねど高楊枝のものを持っている会社と、そうでない会社とで何に違いが出るか。私が見ていて思う

のは、会社の関係者の顔の明るさの違い、背筋の伸び方の違いです。「里山市場主義」の登場人物も、皆さんそんなにお金持ちではないのですが、顔は実に生き生きとしていました。

会社を輝かせるシステムとは

原田：社会に良いことをして、会社もなんとかなって、給料をもらえたらい一番うれしいですよね。なかなか理解してもらえない所もありますが、一つ一つ実績を積み上げていくことによって従業員も理解する人が増えていく。それが一番大切だと思います。

藻谷：それが結果、「会社の輝き」を作り出すのでしょうか。お金儲けだけではないサブシステムが社内にあることが、社員の士気と意欲を高め、本業も良くしていくのではないかでしょうか。

神社が何のためにあるのですかと言われても、「何かわからないけれど、大事にしてべきおくものだ」としか言いようがない。神様を信じる、信じないではなく、神社があって、そこにきれいな森が残っていること自体が大事なのです。

同じように、女性をよく登用している会社、CSRをきちんとやっている会社の方が業績が良い。業績がいいからこそCSRができるのだ、という見方もできそうですが、そうではありません。社員をこき使ってコストを安くするというのは、短期間は誰でもできるけれども続かない。続く会社、続く国は、モラルも高いのです。

原田：当社の環境活動も、会社の理念が重要なのだと思ってくれる人が増えていき、皆が自信を持てるようなきっかけになれば良いです。今年も「第15回グリーン購入大賞」や「第3回生物多様性日本アワード」^(※4)で優秀賞を頂きました。

藻谷：社員の皆さんも、他社と違うこと、他社より一步進んでいることを誇っていただきたい。

本業ではさすまじいばかりのコストダウンをやっている会社が、まさにオルタナティブなサブシステムとして里山を軸にしたCSRを展開しておられる。そうした姿は、社員の方々だけではなく、里山に生きる人たちにも勇気を与えます。

全ての会社が御社にとっての里山的なものを持つことができれば、日本はもう少し強靭な国として生きていけます。逆に全員が一輪車に乗ってお手玉をしているようなコスト競争だけに走っていくと、どこかでバタつと国全体が倒れてしまいます。

森：一つの企業にしても同じこと。一つの企業がサブシステムを持つということがすごく大事なのですね。

原田：十数年前に、当社が竹紙を導入した時、私はまだこの会社にいなかったのです。しかし「よくやったもんだな、当社のDNAはこういう所にあるのだ」と確信しました。この思いを、後世の社員たちにも受け継いでいきたいと思います。

column vol.2

コラム

「里山物語」寄付金運用事例

里山で活動する団体を支援することで、里山保全と社会貢献を同時に実現します。

海のみえる森（神奈川県大磯町）

<http://www.umimori.org/>

日本初の子どものホスピスです。重い病気や障害を開闢する子どもたちとその家族が、病院とは違う自然豊かな環境で、心と体を休め、生きる力を育むための一時預かり（ショートステイ、レスパイト）施設です。



赤目森作業所（三重県名張市）

<http://akame-satoyama.org/>

「エコなリゾート赤目森」が運営する作業所です。みどり豊かな里山を活用し、一般就労が難しい障害を持った方々に対し、就労機会を提供するとともに、知識および能力の向上に必要な訓練を行うための施設です。



手をつなぐ3.11信州（長野県松本市）

<http://tewotunagu311.net/>

原発事故により長野県に避難されている方、避難・保養を検討している方の当事者ネットワークです。避難者の受け入れ、安全な野菜を望む人たちへ供給などを、里山地帯にある築100年以上の古民家を拠点に活動しています。



森のようちえんピッコロ（山梨県北杜市）

<http://www.mori-piccolo.jp/>

自主運営の幼児教育保育施設です。森の幼稚園とは、自然体験活動を基軸とした子育て・保育、幼児・幼少期教育の総称です。1950年代にデンマークで生まれ、1990年代にはドイツで急速に広がり、日本でも近年高く評価されています。



[第3回生物多様性日本アワード] (※4)：2009年に公益財団法人イオン環境財団が環境省との共催で日本の生物多様性の保全と持続可能な利用の促進を目的に創設される。「竹紙」の取り組みが日本在住の団体・個人による生物多様性の保全と持続可能な利用に関する取り組み 104 件の応募の中から、特に優秀な事例として第3回生物多様性日本アワードで優秀賞を受賞した。P17に詳細記載。

02

Special Contents 02 Visiting Three SATOYAMA

三つの里山巡り

社内 博之／永岩 建一／片岡 裕雅

中越パルプ工業の創業の地であり、本社と工場がある高岡市。勝木原地区は、市内で唯一、放牧が行われている牧場がある。春には山菜採りツアー、初夏には満天の星空の下、無数の螢を楽しめる。晩秋の山を焦がす紅葉は立山にも引けをとらない。隣接する国吉地区は市内でも指折りの良質米産地であるほか、おいしいゆんごの栽培も始まった。

1 富山 二塚

Hiroyuki Shanai
TOYAMA / PUTATSUKA



2 鹿児島 薩摩川内

Kenichi Nagaiwa
KAGOSHIMA / SATSUMASENDAI



3 東京 銀座

Hiromasa Kataoka
TOKYO / GINZA



02-1

Special Contents

Skyful of Stars and Lightning Bugs

満天の星の下、螢を楽しむ



社内 博之
Hiroyuki Shanai
高岡本社
生産本部 二塚製造部



水道つじ公園

田舎暮らしの一番の魅力は、1年を通じ自然を満喫出来ることです。四季折々の風情を感じながら生活できることは、都会では考え難いと思います。

私の住んでいる高岡市勝木原は市内で唯一、放牧が行われている牧場があります。春には加越能観光とタイアップした山菜採りツアーが企画され、初夏には満天の星空の下、無数の螢が飛び交います。また、晩秋の山を焦がす紅葉は立山にも引けをとりません。

自然の良さを感じられる反面、実際暮らすとなると大変なこともあります。例えば、家の敷地の除草、雪が降り出す前の雪回し、冬季の除雪等の他に集落の共同作業として、用水の清掃や草刈り、神社の清掃、祭りなどのイベントも多々あります。

もう一ヵ所、皆さんにご紹介したい場所があります。その場所は、私の娘が卒業した国吉中学がある国吉地区です。高岡市の西部、小矢部川西岸に位置し小矢部市・氷見市に連なる富山西部丘陵に隣接する農村地帯です。周辺には水道つじ公園、三千坊山展望台などがあり、市民の憩いの場としても知られています。

当地区は市内でも指折りの良質米産地ですが、近年では高速道による農地の改廃や中山間地耕作の放棄が目立ってきています。

林業構造改善事業の一環として、平成元年に鴨料理の試作販売を行ったところ、大好評となり、平成2年に組合が設立され、「かもの里」の運営が始まりました。その後、特産物作りの検討を重ね、平成2年から皆さんご存知の「国吉りんご」の栽培が始まりました。運営開始当初160アールだったリンゴ畑も460アールとなり、一経営体としては県内最大の面積となりました。

また平成15年度からオーナー制度を導入し約300本の契約をしています。当社従業員の御家族にもオーナーがいらっしゃると聞いています。みなさんも一度国吉りんごを食べにいらしてはいかがですか？



高岡市勝木原 自宅周辺



TOYAMA
富山

Special Contents 02 Visiting Three SATOYAMA

02-2 Special Contents

Our Familiar Gods

意外と身近な神様たち



私たち製紙会社にとって、木材はとても身近な存在です。周りを見渡して見える山々は、古くから薪や牧草などの生活必需品を提供し、大きな木材は柱や板など建築材として利用されてきました。

このように山と人が密接な関係を築いている山を「里山」と呼び、昔から親しんできました。特に木材をチップへ加工するチップ工場では、里山から木材という大きな恩恵を受けており、感謝を示すため、春と秋に「山の神祭(ヤマンカンマツリ)」を執り行います。

「山の神祭」の起源は諸説ありますが、大きく分けて二つあります。

一つ目は木材やタケノコ、狩猟など山からの恵みを受ける人たちです。本来日本では山は故人の靈が鎮まる場所として考えられ、山に入って仕事をさせてもらうために許可を取らねばならないとされてきました。

この許可を取らずに山に入ると、春に木や花の種を蒔き、秋に葉を落とすために山を駆け回る山の神の邪魔をして事故を起こすといわれています。そのため、伐採や収穫の季節である秋は入山の許可と安全を願い、山仕事をひと段落する春には感謝をするために祭事を執り行います。

二つ目は農業を行う人たちです。山の神が春になると



田植えや種付けのために山から下りてきて、「田の神(タノカンサア)」となり、その後の生育を見守ってくれます。そして秋になり、収穫が終わると山に帰っていくと考えられています。鹿児島県では、稲作の多い地域の田んぼ脇に「田の神」を祭っており、地域の人たちに親しみをもって信仰されています。

しかし、里山を利用する事が少なくなった現在では、古くから続く里山と人の繋がりが薄くなりつつあります。里山は人と共にあってこそ、本来の姿を取り戻すことができます。私たちも、製紙業を通して、地域の里山とより良い関係を作り続けることが大切だと思います。



鹿児島県の有形民俗文化財に指定されている「田の神」は、鹿児島県と宮崎県南部に約2,000体あり、庶民的な神様として農作を願う地域の人から愛されています。

02-3 Special Contents

Ginza, a Dutchman and Japanese Paper

銀座とオランダ人と和紙



片岡 裕雅
Hiromasa Kataoka
東京本社
営業管理本部 営業企画部

東京本社がある「銀座」は言うまでもなく、世界に誇る日本最大の高級商業地です。新宿や渋谷とは違う落ち着いた大人の雰囲気で、日本の老舗店、世界のブランド店、一流デパートなどが立ち並び、休日は歩行者天国にたくさんの買い物客、観光客が訪れ、銀座そのものがブランド化しています。

都会のイメージが強く、「里山」をイメージできないかもしれません。しかし、この銀座にも「和紙」を使って「里山」を感じさせる取り組みを進めている人がいます。しかもオランダ人です。

ロギール・アウテンボーガルドさんは日本の手漉き和紙に惚れ込み、オランダから高知に移り住みました。

1981年から紙漉き修行を開始して、現在、高知県の梼原町で紙漉き体験民宿「かみこや」を経営しています。

私の郷里の近くなので、縁を感じます。地元の和紙原料にこだわり、楮(コウゾ)、三桠(ミツマタ)という植物の栽培から紙作りまですべて自分で行っています。2007年には高知県が優れた職人を認定する「土佐の匠」にも選ばれました。

そのロギールさんは、中越パルプと親交の深いNPO法人銀座ミツバチプロジェクトに紹介されました。同法人では紙パルプ会館の屋上でミツバチを

飼育することで、世界的に有名な団体です。今では、都市と農村をつなぐ様々な活動を行っています。

ロギールさんから、銀座のデパートや会社の屋上で高知県の楮と三桠を育て、銀座商店街で手漉き和紙を作っていると聞き、洋紙メーカーに勤める私が強く興味を持ちました。その結果、中越パルプも2012年4月から東京本社ビルの屋上で、酒樽を鉢にして、楮と三桠の苗木をもらい、計5鉢で育てています。

植物好きな社員を中心に、愛情を込め順調に成長しています。育った楮と三桠は、12月にロギールさんが収穫して和紙を抄きました。切り口から再び芽を出した楮と三桠は、今年も順調に育っています。

銀座で働く洋紙メーカーの社員と高知のオランダ人和紙職人の奇妙なコラボレーションが、都市と里山を結んでいます。こうした日本の伝統工芸である和紙の原料である楮や三桠を知ること、その産地や生育環境に興味を持つことによって、都会に住んでいる人でも、里山が身近に感じられると思います。

今後、あちこちの銀座の屋上で育った原料でロギールさんが和紙を作る、その和紙が社会的な取り組みに活かされる、そんな「銀座和紙プロジェクト」を夢見て、応援しています。



適度な水やりだけで、順調に成長しています。
ロギール・アウテンボーガルドさん。切った楮と三桠を集めて和紙に生まれ変わります。

第3回「生物多様性日本アワード」

The Japan Awards for Biodiversity 2013



環境への取り組み

Action for Environment



当社の「竹紙」の取り組みが、
第3回「生物多様性日本アワード」
において、「優秀賞」を受賞いたしました。

(主催:公益財団法人イオン環境財団、共催:環境省)



日本においては、長い間、人と自然の共生が維持され「里山」など生物多様性にあふれる独自の素晴らしい環境が整っていました。しかし近年、社会経済的な理由から人と自然の関係が保たれなくなり、私たちの暮らしのよりどころである里山での生物多様性損失が大きな問題となっています。当社の「竹紙」の取り組みは、本来紙の原料として不向きな日本の竹を製紙原料として活用しています。

1998年より開始し、試行錯誤の結果、現在年間2万トンを超える竹の集荷体制を整えました。紙の製造という当社の本業を通じて、全国的に広がる放置竹林という社会的課題に挑戦しています。竹を使用することで、手入れされずに放置された竹林の里山や森林への侵食を防ぎ、失われつつある二次的自然環境を持続可能な形で保全・利用しています。



生物多様性
日本アワード
Asian Awards for Biodiversity 2013

中越パルプ工業の環境に関する基本方針

01 基本理念 Fundamental Philosophy

中越パルプ工業は、地球的視野に立って「環境にやさしい企業活動」を基本に、地球規模での環境保護と持続的発展が可能な豊かな社会の実現を目指して努力いたします。

02 基本方針 Basic Policy

- 資源の保護と有効利用を推進する
- 環境負荷の少ない新技術の開発と導入及び新製品の開発を図る
- 地球環境の維持と向上に努める

03 行動方針 Course of Action



廃棄物の有効利用

The Utilization of Waste

リサイクル率の向上を図り、循環型社会の形成に努めます

廃棄物発生量・最終処分量

Quantity of Waste Outbreak and Quantity of Final Disposal

中越パルプグループの2012年度の廃棄物発生量は約47千トンで前年度から2千トン減少しました。これは2012年度の紙・板紙生産量が減少し、発生量のうち約8割を占める有機性ペーパースラッジが減少したためです。

	単位	1990年度	2010年度	2011年度	2012年度	前年比
廃棄物発生量	千t / 年	33	52	49	47	4% 減
最終処分量	千t / 年	13	11	5	3	40% 減
有効利用率	%	61%	79%	90%	94%	

廃棄物発生量のうち44千トンを有効活用しています。
最も発生量が多いペーパースラッジは、自社の廃棄物焼却炉により焼却処分し、減容化を図っています。焼却後に発生するばいじんは、セメント原料や土木原料として再利用されています。

廃棄物焼却炉 [高岡工場]



廃棄物の有効利用

The Utilization of Waste

本質バイオマスボイラーや新エネルギーボイラーで、建築用廃材、解体材、廃タイヤ及び廃プラスチックを原料にしたRPF等の廃棄物由来燃料を利用し、工場内で使用する電気や蒸気として利用しています。非化石燃料の有効利用を進めるとともに、他業種から排出される産業廃棄物を積極的に使用し、再資源化に貢献しています。



廃棄物の分別・処理に関する教育

Education Regarding Sorting and Disposal of Waste

社員以外に、構内に出入りする関係会社従業員を対象とし、定期的に廃棄物の分別・処理方法の教育、再確認を行っています。



環境管理体制の強化

Environmental Management System Reinforcement

全工場でISO14001を取得し環境マネジメントシステムを構築しています。

環境に関する基本的な考え方や方向性を環境方針に定め、継続的な改善活動に取り組んでいます。

環境モニター懇談会の開催

Meeting with Environmental Monitors

環境モニター制度により、モニター懇談会を年間2回開催し、工場周辺の住民の方々から貴重な意見や情報をいただいている。モニターサンからの声を真摯に受け止め、環境保全の推進に役立てています。



環境内部監査の実施

Internal Audit Regarding Environmental Issues

環境内部監査は、監査指摘事項や環境事故の再発防止策の進捗管理や遵守状況、周知度を確認するため抜き打ちで実施します。書類や現場員からのヒヤリングを通じて再発の可能性等を監査します。



環境監査

Environmental Audit

環境管理保全規定に則り毎年1回各工場を対象とした監査を行い、環境保全に関する業務の実施状況を書類と現場巡視により監査しています。監査での指摘事項は、重点課題として改善・是正が完了するまで確認されるシステムとなっています。



環境教育の推進

Propelling Environmental Education

コンプライアンス遵守と周知徹底を目的に全職場で毎月1回環境コンプライアンスマーティングを実施しています。過去に発生した環境事故、環境ヒヤリを事例集にまとめ各工場へ水平展開し、自分たちの職場に同様なリスクがないか点検し、リスクの撲滅を図っています。



気候変動対策

(2012年度／2012年4月～2013年3月の実績)

Measures for Climate Change

バイオマスエネルギーの積極利用により、化石燃料の使用削減に努め
温室効果ガスの排出量削減に積極的に取り組んでいます。

CO₂排出量削減の推移

Process of CO₂ Emissions Reduction

2012年度の化石エネルギー起源CO₂排出量を1990年度比で351千トン削減し、3年連続で削減率約50%を達成しました。削減の主要要因は、需要低迷と景気の停滞による減産及びバイオマスボイラー稼働による化石燃料使用量の削減の成果です。製品当たりの化石エネルギー起源CO₂排出原単位は、東日本大震災後、原発停止により購入電力の使用に伴う炭素排出係数が大きくなり、2011年度以降、悪化傾向を示しています。



バイオマスエネルギー構成比率

Biomass Energy Rate

バイオマス燃料や廃棄物由来燃料を積極的に使用し、化石燃料から非化石燃料への転換を進めています。その結果、2010年度以降バイオマスエネルギーと廃棄物エネルギーの合算比率は70%以上を維持しています。



メガソーラー発電所の設置

Installation of Mega Solar Powerplant

薩摩川内市が進めている「次世代エネルギー導入を通じたまちづくり」の一環として、遊休社有地を活用しメガソーラー発電所を設置しました。自然エネルギーを有効活用し、地球環境負荷の少ない循環型社会の実現を推進します。



メガソーラー発電所 [川内工場]

木質バイオマス燃料発電事業への参入

Launching Woody Biomass Powerplant

2009年に高岡工場に木質バイオマスボイラーを設置するなどバイオマス燃料の積極使用を推進してきました。更に2015年までに川内工場に木質バイオマスを燃料としたボイラーの建設を計画しています。



木質バイオマスボイラー [高岡工場]

原材料の調達

Procurement of Raw Materials

持続可能な資源の有効活用に努めています。

合法性を遵守した原料調達

Procurement of Materials under Legal Observance

当社が原料として使用する木材チップは、当社の「原材料調達指針」に沿って、違法伐採行為を排除し、伐採地域の森林経営の環境面と社会的健全性に配慮した調達を行っています。合法証明システムを構築し、調達先ごとに伐採地域、伐採した森林の形態、対象となる法令等をトレーサビリティレポートにより把握しています。この合法証明に関しては、年に1回、日本製紙連合会の監査を受け、問題のないことを確認しています。

【原材料調達指針】

- 森林資源の保護育成と地球環境への貢献
再生可能な資源である森林を育成保護し、健全な林産業経営を営んでいるソーシャルな目途を通じて地球環境及び地域経済への貢献を目指します。
- 合法性遵守と持続可能性の維持
現地の法律や規則を遵守し、持続可能な森林経営が営まれている森林から生産された木材のみを原料として使用します。(違法伐採材は使用しません)
- トレーサビリティの確保
木材の合法性、持続可能性を確認するシステムを構築、安全な原料の調達に努めます。
- 森林資源の有効利用
製材残木、間伐木、家屋解体材等の木質資源を積極的に利用し、資源の有効活用に努めます。
- 植林事業の積極推進
植林事業を積極的に推進するとともに、植林木苗比率を高めています。
- 森林認証システムの積極活用及び推進
森林認証システムを構築的に活用し、高保護価値林が保護され、伝統を守る権利または市民権が侵害されていない、適切に管理された森林から生産された木材の削減に努めます。
- 情報の公開
木材原料調達ソースの情報を開示します。

持続可能な森林資源の利用

Utilizing Sustainable Forestal Resources

持続可能な森林資源の利用のため、当社はFSC®、PEFCの森林認証制度により適切に管理された森林からの木材チップの調達を行っています。認証材は、木材チップの生産を行うサプライヤーから商社を介して当社が原料を調達するまで、製造・流通の全ての段階の取引先がCOC認証を取得しており、当社も第三者機関による審査を受けたうえで、FSC®やPEFCの認証製品としての販売を行っています。



[FSC®] Forest Stewardship Council

FSC®は環境団体、林業者、木材取引企業、先住民団体、地域林業組合等の代表者から構成されるNPOで、国や地域に関わらず、同じ基準・ルールを適用し、基準に則した森林管理が行われていることを評価、認証しています。



[PEFC] Programme for the Endorsement of Forest Certification

PEFCは各国の独立した持続可能な森林認証規格制度がお互いの規格を承認すること目的に加盟、運営するNGOで、ISO方式の認証手順を採用し、各國・各地域が有する独自の森林認証制度が共通する国際的な持続可能な森林管理レベルに達していることを評価し、相互に承認しています。

管理木材としてのリスク評価

1	違法伐採された木材
2	伝統的な権利及び市民権を侵害し伐採された木材
3	管理活動により高い保護価値が危機に瀕している森林から伐採された木材
4	人工林(プランテーション)または非森林用途に転換されつつある森林から伐採された木材
5	遺伝子組み換え木本が植栽された森林からの木材

従業員の健康と安全

Keeping Employee's Health and Safety

働く人々の健康と安全を第一に考え、安心して働ける職場環境づくりに努めています。

歴史物の有効利用

環境管理体制の強化

気候変動対策

原材料の調達

従業員の健康と安全

2013トピックス

地域との共生への参加

環境データ集

健康づくり Health Promotion

従業員及び家族の方々へ、中巴健康フェスタなどのイベントを通じ、健康づくりに努めるとともに健康意識向上を図っています。また地域の各種健康イベントにも積極的に参加を促し、健康づくりとメンタルリフレッシュの機会を増やす情報を配信しています。

救命講習会の実施 Enforcement of the Lifesaving Course

消防署の指導のもと、普通救命講習会を開催し、多くの従業員が心肺蘇生やAED(自動体外式除細動器)の取り扱いを学ぶなど、不慮の災害に備える訓練を実施しています。



防火防災訓練の実施 Enforcement of Fire and Disaster Prevention Drill

定期的に消火訓練や地震対応訓練、薬液漏れ訓練などの非常時対応訓練を行っています。

障がい者雇用 Disability Employment and Inclusion

平成24年度の障がい者雇用率が「1.87%」と法定雇用率(1.8%)を上回りました。平成25年度は、法定雇用率が2.0%に引き上げられましたが、障がい者雇用の促進を図り、法定を上回る雇用率となる見込みです。

障がい者雇用率			
	H22年度	H23年度	H24年度
法定雇用率	1.80%	1.80%	1.80%
当社雇用率	1.50%	1.94%	1.87%

ワークライフバランス Work Life Balance

従業員一人ひとりが、仕事と子育てを両立させることができ働きやすい環境をつくることによって、その能力を十分発揮できるよう、次世代育成を支援しています。毎週水曜日を『ノー残業デー』とし、家族団らんの時間を過ごすために定時退社を奨励しています。また、ボランティア活動に参加する従業員の社会貢献活動を支援することを目的に『ボランティア休暇制度』を設け、制度を利用して多数の従業員が東北復興ボランティア等に参加しています。

2013 トピックス

Topics in 2013

中越パルプ工業の取り組みや評価

RIO+20 サイドイベントで世界に発信 Information Transmitting to the world by RIO+20 event



RIO+20 (国連持続可能な開発会議)

竹紙の取り組みが、ブラジル・リオデジャネイロで開催された RIO+20 (国連持続可能な開発会議) のサイドイベントで世界に向け発信されました。

6月18日に「SATOYAMA イニシアティブとグリーンエコノミー」をテーマとしたサイドイベントが開催され、パネルディスカッションのなかで星野一昭環境大臣補佐官(当時)が「SEPL(社会生態学的生産ランドスケープ: socio-ecological production landscape)における社会経済活動:日本の経験」と題した発表のなか、日本を代表する生物多様性保全の取り組み 4 事例のひとつとして、当社の竹紙の取り組みを紹介しました。

ソーシャルイノベーションカンパニーとしての評価 Evaluation as a Social Innovation Company

公益財団法人日本財團が実施した、東証一部上場企業 1,680 社及び未上場企業売上高上位の企業を対象としたソーシャルイノベーションの実績についての調査により、特に先進的な取り組みを行っていると思われる 8 社に当社が選ばれました。竹紙や里山物語の取り組みや発信力が評価されました。



公益財団法人 日本財團主催セミナーによる「新しい価値を創造する企業とは」

地域との共生

Symbiosis with the Local Community

地域社会との共存共栄を図り、誰からも愛され信頼される企業を目指して努力を続けています。

廢棄物の有効利用

環境管理体制の強化

気候変動対策

原材料の調達

従業員の健診と安全

2013～2014年

地域との共生
への参加

環境データ集

森林環境教育

Environmental Education in Forestal Area

川内工場近くの小学校にて森林環境教育を実施しました。小学5年生約90名の児童に「紙と森の話」と題して紙を生産する工場の視点から、森林との関わりや放置竹林の問題などを説明しました。教材として「チップ・パルプ・紙」を袋詰めたサンプルを全員に配布し、実際に見て触れてもらうことで紙と森のつながりを感じてもらいました。



若元小学校への出前授業

介護施設へ竹紙贈呈

Donating Bamboo Paper to Nursing Home

薩摩川内市の通所介護施設「グリーンヒルデイサービス俱楽部」を訪れ、「施設に通われる方の機能訓練に役立てて欲しい」と、竹紙の折り紙や習字紙を贈呈しました。美しい里山や竹林の風景を思い浮かべながら、折り紙や習字を楽しんでいただきたいと願っています。



介護施設へ訪問

マイクロチッパー機(2機)贈呈

Donating Micro-Chipper Machine

かぐやの竹利用応援事業として、森林ボランティアや地域住民の皆様による竹林整備活動を支援する体制づくりに取り組んでいます。とやまの森づくりサポートセンター貸出機材として里山地区の住民の方々やボランティアの方々の森づくりに活用していただく目的で、マイクロチッパー機(2機)を富山県に贈呈しました。



マイクロチッパー機

七夕まつりへの孟宗竹寄贈

Donating Bamboo to the Tanabata Festival

高岡市民から親しまれている『高岡七夕まつり』が高岡駅周辺を中心に開催されました。約15mのジャンボ七夕をはじめ、大小約1,000本の竹に色とりどりの短冊や飾り、灯籠が下げられ、風になびく姿は夏の風物詩となっています。今年も鹿児島県の孟宗竹約26本と竹紙の短冊を川内工場から高岡市へ寄贈し、まつりに彩りを添えました。



高岡七夕まつり

地域行事への参加

Participation in Local Community Events

中越パルプグループでは、工場所在の地域行事に積極的に参加しています。

唐浜白砂青松の森づくり参加

Growing a Forest in Karahama Area

薩摩川内市の唐浜周辺を中心に実施されている「唐浜白砂青松の森づくり」が開催され、グループ従業員や中バ森林ボランティア「はっぱクラブ」など約60名が参加しました。松くい虫の被害が著しい唐浜の松を再生するために抵抗性マツの植栽を行い、周辺の清掃を実施しました。



唐浜白砂青松の森づくり

清掃ボランティア活動

Providing Volunteer Works for Cleaning Projects

高岡本社・高岡工場・二塚製造部及び協力会社従業員総勢36名が参加し、川底の砂利や両岸の壁の清掃を実施しました。



桜川清掃

射水市に「中バの森」オープン

Opening of the Churpa Forest in Imizu City

富山県射水市淨土町で整備を進めていた里山「中バの森」が開所しました。地元ボランティアの方々のアドバイスを得ながら、東屋や遊歩道の整備を進めてきました。里山再生のシンボルとして、地域住民の方々や市民の憩いの場、自然観察の場としての活用を計画しています。



「中バの森」開所式

森林整備ボランティア

Providing Volunteer Works of Forest Maintenance

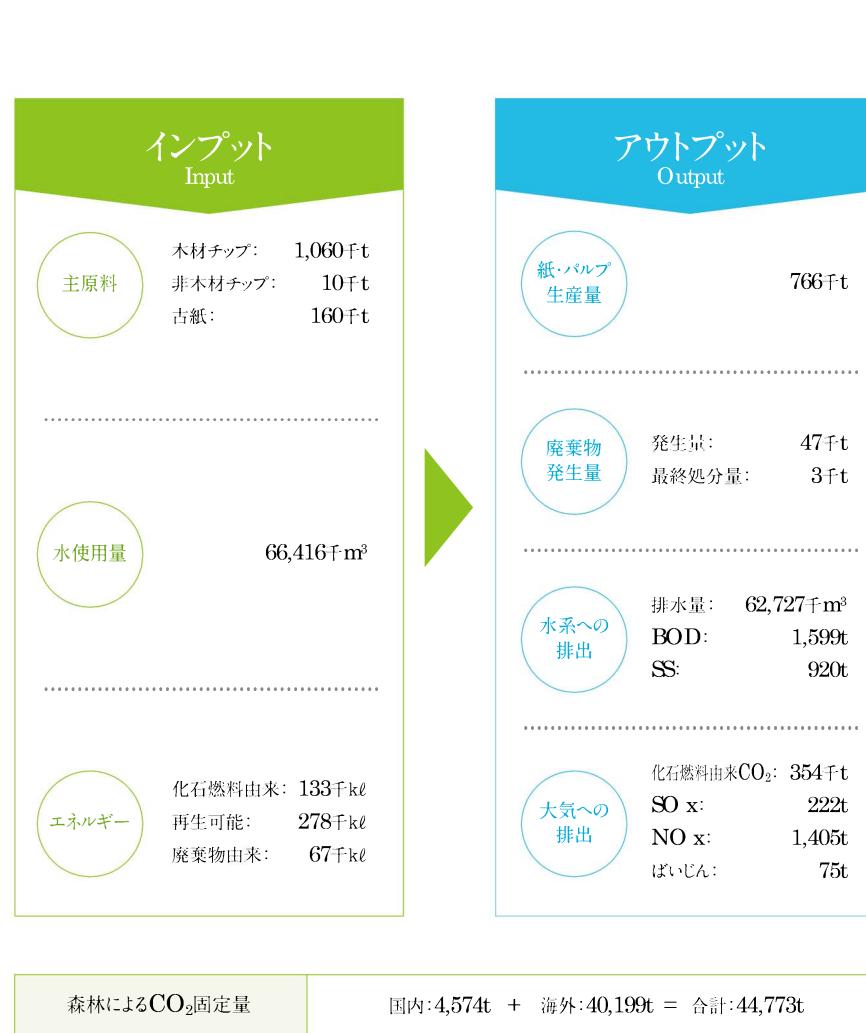
森林整備の体験を通して森林の恵みを学ぶとともに、地球温暖化防止活動を実施する「森林ボランティアの日」活動を薩摩川内市の「中バの森」にて開催しました。鹿児島県内の森林ボランティアの方々やグループ従業員など約300名が森林整備に汗を流しました。今後も自然観察や憩いの場として幅広く利用いただけるよう整備を進めています。



森林ボランティア活動

生産活動に伴うマテリアルバランス

Material Balance with the Production Activity



環境会計

Environmental Accounting

環境保全コスト

分類	主な取り組みの内容	投資額	費用額
(1) 生産・サービス活動により事業エリア内で生じる環境負荷を抑制するための環境保全コスト(事業エリア内コスト)		765	5,706
① 公害防止コスト	a. 大気汚染防止 b. 水質汚濁防止 c. 悪臭防止 d. 騒音防止、その他公害防止	669	5,153
② 地球環境保全コスト	a. 省エネルギー b. 国内植林 c. 海外植林	80	13
③ 資源循環コスト	a. 古紙など資源の有効活用 b. 廃棄物削減・再利用・処分	16	540
(2) 生産・サービス活動に伴って上流または下流で生じる環境負荷を抑制するためのコスト(上流・下流コスト)		0	290
① 容器・包装などのリサイクル	パレット・紙管の回収・再使用	0	279
② 容器・包装の低環境負荷化	包装紙のノーラミネート化	0	11
(3) 管理活動における環境保全コスト(管理活動のコスト)		0	84
① 社員環境教育など	従業員監督者研修、資格取得など	0	9
② 環境マネジメントシステムの構築・運用・認証取得	FSC認証、ISO14001認証審査等	0	6
③ 環境負荷の監視・測定	ダイオキシン類分析など	0	20
④ 環境保全対策組織人件費	環境管理組織	0	49
(4) 研究開発活動における環境保全コスト		0	87
(5) 社会活動における環境保全コスト(社会活動コスト)		0	5
① 地域住民環境活動支援など	地域社会対策、環境モニター	0	2
② 環境情報の公表、環境広告	環境報告書、ホームページ	0	3
(6) 環境損傷に対応するコスト	硫黄酸化物公害健康補償賦課金	0	45
合 計		765	6,217

主要な環境データ

Main Environmental Data

廢棄物の有効利用

環境管理体制の強化

気候変動対策

原材料の調達

従業員の健康と安全

2013～2023年

地域活性化への貢献

環境データ集

水質関連データ Water Quality Data



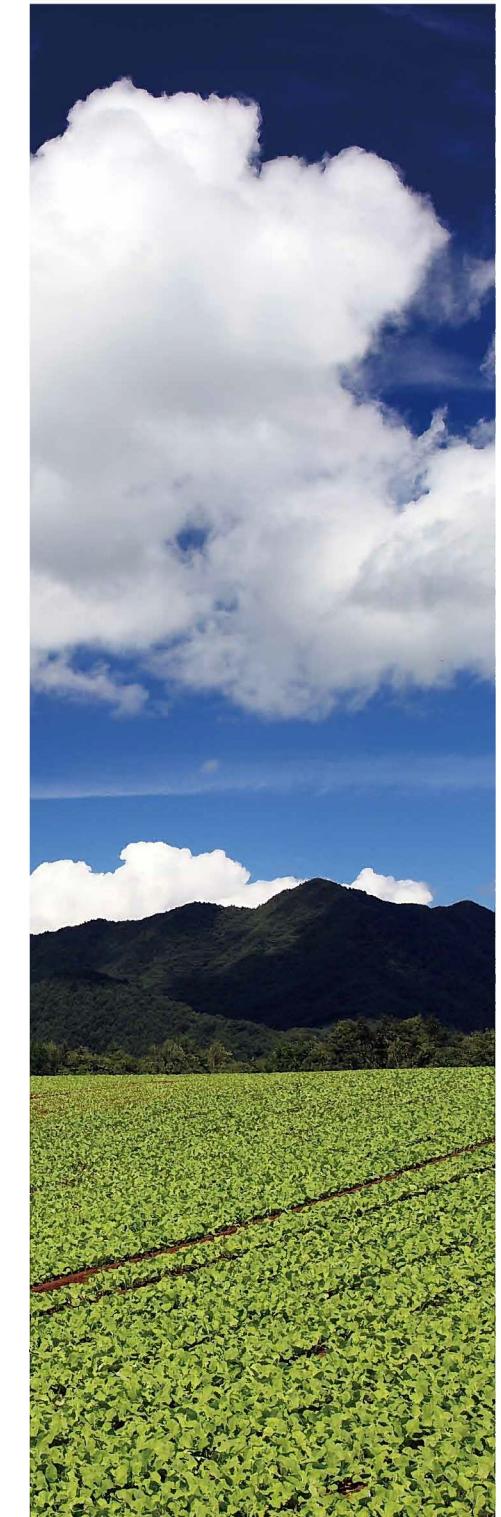
・BOD…水中の有機物などの量を、その酸化分解のために微生物が必要とする酸素の量で表したもの。数値が大きいほど、その水質は悪いと言えます。
・SS…水中に浮遊している物質の量を表したもの。数値が大きいほど水の済りが多く、水流への堆積物の原因になります。

大気関連データ Air Quality Data



・SOx…化石燃料中に含まれる硫黄が燃焼する際に発生する化合物。酸性雨の原因となります。
・NOx…ボンバーなどで燃料を燃焼する際、空気中の窒素や燃料中の窒素と酸素が反応し発生する化合物。光化学オキシダントの原因となります。

産業廃棄物関連データ Industrial Solid Waste Data



会社概要

Company Profile

商 号	中越パルプ工業株式会社 Chuetsu Pulp & Paper Co., Ltd.
東京本社所在地	東京都中央区銀座 2-10-6(本店所在地)
高岡本社所在地	富山県高岡市米島 282
創業	1947年(昭和22年)2月20日
代表	代表取締役社長 原田 正文
資本金	172億59百万円(2013.3.31現在)
主な事業内容	紙(印刷・情報用紙、包装紙、特殊加工紙、新聞用紙等)・パルプの製造販売

■売上高の推移 (単位:百万円)

年度	2007	2008	2009	2010	2011	2012
単体	96,348	95,099	86,290	89,232	86,922	77,153
連結	113,325	110,241	100,406	103,798	100,637	90,506

■従業員の推移 (単位:人)

年度	2007	2008	2009	2010	2011	2012
単体	819	844	835	854	842	828
連結	1,805	1,830	1,790	1,766	1,741	1,714

■編集方針について

- 数値データ対象期間
本報告書は2012年度(平成24年度)の実績を基に記載しています。
- 取り組み報告対象範囲
本報告書の対象範囲は、中越パルプ工業株式会社の社会・環境の取り組みです。
- 対象分野
本報告書には、中越パルプ工業の環境の側面、社会的側面、経済的側面を掲載しています。

■ホームページ ▶ <http://www.chuetsu-pulp.co.jp>

本書に関するお問い合わせ先

中越パルプ工業株式会社 生産本部 環境管理統括部
〒933-8533 富山県高岡市米島 282
TEL. 0766-26-2462 FAX. 0766-26-2454

発行日 2013年12月

事業所一覧

Locations and Facilities



高岡工場



川内工場



二塚製造部



■本社

東京本社
〒104-8124
東京都中央区銀座 2-10-6
TEL. 03-3544-1524

高岡本社
〒933-8533
富山県高岡市米島 282
TEL. 0766-26-2401

■工場

川内工場
〒935-8540
鹿児島県薩摩川内市宮内町 1-26
TEL. 0996-22-2211

高岡工場
〒933-8533
富山県高岡市米島 282
TEL. 0766-26-2401

生産本部二塚製造部
〒933-8526
富山県高岡市二塚 3288
TEL. 0766-28-6600

■支社・営業所

大阪営業支社
〒550-0003
大阪府大阪市西区京町堀 1-1-20
中越大阪ビル 6階
TEL. 06-6441-7151

名古屋営業所
〒460-0003
愛知県名古屋市中区錦 2-15-22
りきな名古屋ビル 4階
TEL. 052-221-9131

福岡営業所
〒812-0011
福岡県福岡市博多区博多駅前 3-19-5
博多石川ビル 6階
TEL. 092-411-4962

北陸営業所
〒933-8533
富山県高岡市米島 282
TEL. 0766-26-2470

■グループ会社

三善製紙株式会社
中越緑化株式会社
中越パッケージ株式会社
中越物産株式会社
株式会社文運堂
中越ロジスティクス株式会社
中越テクノ株式会社
共友商事株式会社
共同エステート株式会社